

「桃太郎」の「戦略」

宮 廻 和 男

The “Strategy” of “Momotaro”

Kazuo Miyasako

1. はじめに

〈桃太郎〉ほどさまざまに利用された英雄はいない。強い桃太郎、弱い桃太郎、軍国の桃太郎、民主主義の桃太郎。滑川道夫の労作『桃太郎像の変容』を読めば、その幅の広さに驚かないわけにはいかない。エーコ流に言えば、「桃太郎」こそ〈開かれ〉の代表的なテキストということになるであろう。つまり、解釈者に解釈のさまざまな組織化の可能性を与えており、典拠作品としてのメタ・テキストの範疇を越えて〈桃太郎〉の新しい解釈を解釈者に可能性にさせているのである。例えば、〈桃太郎〉は帝国日本のシンボルとなり、〈鬼〉は敵国ロシヤのシンボルとなって、〈桃太郎〉の〈鬼退治〉は〈帝国日本〉の〈ロシヤ征伐〉に読み替えられる。あるいは桃太郎／鬼の対立は、階級的イデオロギーの対立に置換された。

この「桃太郎」を〈開かれた〉作品として利用した作家は多い。芥川もそのひとりである。彼の『桃太郎』は1924年に『サンデー毎日』に発表された。この作品が興味をひくのは、単なるメタ・テキストとして民間伝承の『桃太郎』を利用し桃太郎の鬼退治を再解釈していない点である。それでは、芥川はいかにして『桃太郎』を〈開いて〉いったのだろうか。

本稿では、民間伝承の『桃太郎』を芥川がいかに関心をもっているかを分析していくことにねらいがある。あるいはロシア・フォルマリズム流の用語を使うならば、「桃太郎」という〈素材〉（ファースト）をいかに利用して、〈筋〉（シュジェート）に置換しているかを探るものである。〈開かれた〉作品としての〈桃太郎〉そのものの分析が目的ではない。

2. 『桃太郎』たち

民間伝承の「桃太郎」は人口に膾炙した話ではあるが、その話型は次のようである（関1980：143）。

「桃の子太郎」

1. 婆が（a）川で（箱に入ってきた）桃を拾う。

（b）山で桃（栗）を拾う。

それから男児が生まれる。

2. その子が猿、犬、雉子に団子を与えて協力者として鬼が島に行き、鬼を退治して宝物を得て帰る（家が富む）。

鬼退治の民間伝承は多々ある。しかし「桃太郎」は、この話型2の動物の協力者と遠方の鬼が島へ退治に出かけるという部分が好まれて、同様に協力者の出てきて怪物退治をする「こんび太郎」などとは違った扱いを受けることになる。戦前には、桃太郎は「軍国主義」宣伝に一役買うことになり、超多忙の売れっ子アイドルであった。すなわち〈動物の協力者〉＝〈国民〉、〈鬼〉＝〈外敵〉、〈遠方の鬼が島〉＝〈外地〉という対応がすぐさまに得られるからである。「こんび太郎」では、協力者はみな〈強力^{ごうりき}〉であり、怪物退治は国内のある場所での出来事である。何よりも〈こんび〉＝垢でできた英雄が怪物を倒すなど、帝国日本のイメージをすこぶる悪くする。いつの世もアイドルは「清く、正しく、美しく」なのだ。このことから、民間伝承の「桃太郎」は〈開かれ〉た作品であり、さまざまな解釈を許す

ことが可能であることは明らかである。

「桃太郎」は国定教科書にも採用され、新しい解釈を次々に付与されてさまざまな〈物語〉が作られていく。典型的な例を掲げよう。明治37年に発表された「ぼんち御伽絵噺 明治桃太郎」の一節である。石原和三郎が文、北沢楽天が絵を描いている。

(桃太郎) 「鬼めもなかなか強かったが、この犬男、猿丸、雉子郎がよく働いてくれたのでめでたく勝ってまゐりました。」

(ヂー) 「おてがら おてがら お国のためにちうぎちゃ ちうぎちゃ」

(バー) 「たっしやでかへってきてうれしいよ」

(友だち) 「桃太郎万歳、日本帝国万歳」

翌年に発表された桃太郎はロシア征伐の大英雄である。「日露ぼんち 桃太郎のロスキー征伐」と題された作品から一節。石原ばんがく（石原和三郎のペンネーム）の文で、絵は前者と同じ北沢楽天である。

「むかし、桃太郎さんが征伐したのは、南の島の方でしたが、西北の方にまだ悪鬼どもがたくさんおります。それを露^ロ西^ス鬼^{キー}というやつで、よその国の人を殺して食ったり、宝物をさらって行ったりして、いけない奴等であります。」

この2点の表紙は、滑川の『桃太郎像の変容』に口絵写真が掲載されている。後者の桃太郎は羽織、袴姿ではなく、軍服にサーベルで完全に軍人である（なお、前者の表紙には桃太郎は描かれてなく、猿と犬と桃が描かれている）。

「桃太郎」は絵本、童話で広く〈開かれ〉を利用されるが、小説として書かれるのは芥川が最初であろう。1924（大正13年）に発表された芥川の『桃太郎』は次のような構成を持つ。

- 1 神話的発端
- 2 桃太郎と三匹の家来
- 3 桃源郷としての鬼が島
- 4 桃太郎の鬼退治
- 5 その後の桃太郎
- 6 神話的結末

2・3・4については、構成上は民間伝承の「桃太郎」と変わらない。

1・6は民間伝承での「語り始め」「語り納め」と一致すると考えれば、5だけが小説的構成となっている。

桃から生まれた桃太郎は鬼が島の征伐を思い立った。思い立った訳はなぜかという、彼はお爺さんやお婆さんのように、山だの川だの畑だのへ仕事に出るのがいやだったせいである。その話を聞いた老人夫婦は内心この腕白ものに愛想をつかしていた時だったから、一刻も早く追い出したさに、旗とか太刀とか陣羽織とか、出陣の仕度に入用のものはいうなり次第に持たせることにした。のみならず途中の兵糧には、これも桃太郎の註文通り、黍団子さえこしらえてやったのである。

こうして始まる芥川の「桃太郎」の最大の特徴は、桃太郎はどうしようもない悪者であり、やさしい鬼の世界を混乱させる人物という筋書きになっていることである。鬼は侵略者ではなく平和愛好者であり、桃太郎が侵略者として、理由もなく鬼の世界に侵略する。芥川流のいたづらがうまく生かされた作品だ。民間伝承の「桃太郎」は、

桃太郎ア、一杯食^けば一杯だけ、二杯食^けば二杯だけ、大きくなるんじょん。そやて一つ教えれば十までおべるし、だんだんおがって力持ちになったじょん。桃太郎ア、そやてなんもかもさかしいわらしねなったんじょんな。へだだしけア爺と婆とめごがって「桃太郎アエ桃太郎アエ」て喜んでいだっけア。（「手つきり姉さま」所収、青森県）

と、爺と婆にかわいがられた、頭のいい賢い子であった。桃太郎が鬼退治にでかけるときは、

桃太郎アある日爺様と婆様といるところさ来て、チャァンとねまって両方の手こついて、「爺さまア、^じ吾ア大きくなっただしけア、鬼が島さ鬼退治に行きたいしけア、やって下さエ」て頼んだじョン。爺も婆もびくたがて「^{うが}どうして汝、まんだ年も取ねだしけア、鬼ね勝でなエだでア」てへて、止めだども、桃太郎ア「だォんだォんおら勝でるでア」てへて、きかねじョン。爺様も婆様も仕方なくて、「したら行って来ねアか」てへて、婆ア日本一の黍団子よじっばとこしらえてけで、桃太郎ね新しい着物を着せ新しい鉢巻きさせで、新しい袴はかせで、刀ささへて、日本一の桃太郎ッて書だ^{きや}旗持だへて、黍団子腰さ下げさせで、「したら気をつけて行って来い。鬼退治して来るのを待じでるら」て爺と婆に送られて、立って行ったんじョン。

と送られていくのである。

3. 戦略 - 1

先に述べたように、この作品は単なるメタ・テキストとして民間伝承の『桃太郎』を利用し桃太郎の鬼退治を再解釈していない。これは、筋書きの上からもわかる。それでは、芥川はこのメタ・テキスト〈桃太郎〉をどのように作っていったのか。芥川の「戦略」を、池上は次のようにまとめている（池上 1982）。

まず、民間伝承の「桃太郎」の構成を〈悪事〉—〈計略〉—〈処罰〉という項の連鎖とする。つまり、「鬼が〈悪事〉を働く」—「桃太郎が鬼退治の〈計略〉を練る」—「桃太郎は鬼を〈処罰〉する」。「桃太郎」では鬼の悪事は縮小して、うしろの項になるほど意味が強くなる。同じような構成をもつ伝承として「瓜子姫」があり、「あまのじゃくが瓜子姫に〈悪事〉を働く」—

「村人（爺婆）が〈計略〉を練る」―「あまのじゃくが〈処罰〉される」。
 「瓜子姫」では、「桃太郎」と逆に〈悪事〉が強く、〈計略〉が稀薄であり、
 〈処罰〉はあっけないくらいに簡単になっている。さらに、「桃太郎」では、
 桃太郎は善／強という項を有し、鬼は悪／弱という項を有する。「瓜子姫」
 では瓜子姫は善／弱、あまのじゃくは悪／強となる。芥川の「桃太郎」で
 は、桃太郎は悪／強、鬼は善／弱となる。

（作品）	（主人公）	（属性）	（登場人物）	（属性）
「桃太郎」伝承型	桃太郎	善／強	鬼	悪／弱
「瓜子姫」	あまのじゃく	悪／強	瓜子姫	善／弱
「桃太郎」芥川型	桃太郎	悪／強	鬼	善／弱

「このように、芥川龍之介の『桃太郎』では、『瓜子姫』型の構造で〈主
 人公〉と〈敵〉を入れかえるという形でパロディー化がなされています」。

（池上 1982：316）。結局、芥川はふたつのメタ・テキストを利用して（つ
 まり表層構造は「桃太郎」、深層構造は「瓜子姫」）作品を作り上げたとい
 うことである。登場人物の属性ばかりでなく、もう一度、筋の連鎖（つま
 り物語のシンタクス）を見てみよう。「瓜子姫」の「あまのじゃくが瓜子姫
 に〈悪事〉を働く」―「村人（爺婆）が〈計略〉を練る」―「あまのじゃく
 が〈処罰〉される」シンタクスは、可変項（＝登場人物）を変えることに
 よって、そのまま芥川の「桃太郎」のシンタクスになる。「桃太郎が鬼に〈悪
 事〉を働く」―「鬼が〈計略〉を練る」―「桃太郎は〈処罰〉（ここでは「復
 讐」であるが）される」。このような「作品の裏返し」の〈手法〉は、実に
 技巧的である。芥川の「桃太郎」は、エーコいうところの〈開かれ〉を巧
 みに利用した恰好の実例である。さらに、テキストが文字によって紙上に
 固定された〈静的〉なものではなく、変化の可能性を有した〈動的〉なも
 のであることをわれわれに知らしめているのである。ここに、物語生成の
 ダイナミズムを感じないわけにはいかない。

4. 戦略 - 2

もう少し作品の構成を考えてみたい。戦略-1の「ふたつのメタ・テキストの利用」「作品の裏返し」のうち、前者はいささか疑問を持たざるを得ない。芥川がふたつのテキストを考慮して構成を置き換えるほど、「瓜子姫」の構成を意識していたかは判断しがたい。むしろ、彼はメタ・テキストとしては「桃太郎」だけを念頭に置き、徹底して「作品の裏返し」を施した、と考えてみたい。

そこで、まず、何らかの行為を行う登場人物を〈行為主体〉ととらえ、行為を受ける登場人物を〈行為客体〉ととらえて、作品の構成を比べてみる。〈行為主体〉は、必ずしも〈主人公〉ではない。さらに、池上による〈悪事〉—〈計略〉—〈処罰〉の連鎖は、

1. 〈主体〉の〈客体〉への〈行為〉 … 〈悪事〉
2. 〈客体〉の〈主体〉への返答〈行為〉 … 〈計略〉
3. 〈主体〉の〈客体〉への反応〈行為〉 … 〈処罰〉

ということになる。なお、この方法は宮廻1990を参照されたい。

A 伝承型

〈行為主体の行為〉 鬼が人間を襲う

〈行為客体の返答〉 人間側（＝桃太郎）が鬼退治をする

〈行為主体の反応〉 鬼が人間側（＝桃太郎）に敗れる

芥川の「桃太郎」では、すでに見たように登場人物の属性が変わっている。そのため、〈行為主体〉と〈行為客体〉も変化することになる。

B 芥川型

〈行為主体の行為〉 桃太郎が鬼を襲う

〈行為客体の返答〉 鬼が油断している

〈行為主体の反応〉 桃太郎が鬼に勝つ

ここで、〈行為主体の反応〉に注目するならば、A型では「敗れる」、B

型では「勝つ」という反応になっている。「敗れる」も「勝つ」も、すぐ前の〈行為〉の〈反応〉という意味では同一範疇のものである。しかし、「敗れる」／「勝つ」は実際には正反対の対立項であり、視点が異なってしまう。そこで、芥川型の〈行為主体〉も鬼にしてみる。

B₁ 芥川型

〈行為主体の行為〉 ————— (欠如)

〈行為客体の返答〉 桃太郎が鬼を退治する

〈行為主体の反応〉 鬼が桃太郎に敗れる

芥川作品では、鬼が人間を襲うことは書かれていない、すなわち〈欠如〉していることになる。この〈欠如〉を補うように、芥川は伝承にはない話を挿入している。つまり、鬼は桃太郎へ仕返しを試みているのだ。

鬼の子供は一人前になると番人の雉を噛み殺した上、たちまち鬼が島へ逐電した。のみならず鬼が島に生き残った鬼は時々海を渡って来ては、桃太郎の屋形へ火をつけたり、桃太郎の寝首をかこうとした。……その間も寂しい鬼が島の磯には、美しい熱帯の月明りを浴びた鬼の若者が五六人、鬼が島の独立を計画するため、椰子の実に爆弾を仕こんでいた。優しい鬼の娘たちに恋することさえ忘れたのか、黙々と、しかし嬉しそうに茶碗ほどの目の玉を赫かせながら……

ここからもわかるように、芥川は最初の〈行為主体の行為〉を〈欠如〉させて、最後に〈行為主体の行為〉を設置しているといえる。

B₂ 芥川型

〈行為主体の行為〉 ————— (欠如)

〈行為客体の返答〉 桃太郎が鬼を退治する

〈行為主体の反応〉 鬼が桃太郎に敗れる

〈行為主体の行為〉 桃太郎が鬼の仕返しを受ける ——— (追加)

結局、この連鎖は次のようになる。

B。芥川型

〈行為主体の行為〉 桃太郎が鬼を退治する

〈行為客体の返答〉 鬼が桃太郎に敗れる

〈行為主体の反応〉 桃太郎が鬼の仕返しを受ける

もう一度この連鎖を整理し直す。ここで「鬼の仕返し」を桃太郎と鬼の「対立」とし、A伝承型での鬼の敗北を桃太郎と鬼の「和解」と考えてみる。

A 伝承型

	(主体)	(客体)	(内容)
〈行為〉	鬼	桃太郎 (人間)	襲撃する
〈返答〉	桃太郎	鬼	勝利する
〈反応〉	鬼	桃太郎	和解する

B 芥川型

〈行為〉	桃太郎	鬼	退治する
〈返答〉	鬼	桃太郎	敗北する
〈反応〉	桃太郎	鬼	対立する

この表からもわかるように、このふたつの作品では、属性の「裏返し」とともに、「襲撃」／「退治」、「勝利」／「敗北」、「和解」／「対立」という形での行為内容の「裏返し」が成立している。この「裏返し」によって、それぞれの物語の強調される部分も違ってくる。

A型の「桃太郎」の場合は、桃太郎の鬼退治に物語としての焦点がある。それによって、鬼の財宝を得て凱旋する桃太郎は英雄となる。ところがB型の芥川の「桃太郎」では、桃太郎の悪事に焦点が置かれる。それと同時に、平和愛好者である鬼が目玉を赫かせながら桃太郎への仕返しにのめり込む場面にも焦点は置かれ得る。池上の連鎖項を使って考えれば、A型では桃太郎の〈処罰〉を含む英雄行為に向かって物語の価値が設定される。それに対し、B型では桃太郎の〈悪事〉と鬼の〈悪事〉というふたつの〈悪

事〉に向かって物語の価値は設定されていく。

A 型

〈悪事〉 < 〈計略〉 < 〈処罰〉

B 型

〈悪事〉 > 〈計略〉 > 〈処罰〉

A 型（伝承型）では、池上の指摘もあるが、〈悪事〉と〈計略〉は他の昔話に比べると稀薄である。それでも、鬼退治の勝利という形での〈処罰〉が中心価値であることは明らかだ。B 型（芥川）は全く逆である。鬼は理由もなく〈処罰〉される。驚くほどにあっけらかんと。鬼の〈処罰〉は当然のこととして行われている。

鬼の酋長はもう一度額を土へすりつけた後、恐る恐る桃太郎へ質問した。

「わたくしどもはあなた様に何か無礼でも致したため、御征伐を受けたことと存じて居ります。しかし実はわたくしを始め、鬼が島の鬼はあなた様にどういう無礼を致したのやら、とんと合点が参りませぬ。ついてはその無礼の次第をお明し下さる訣には参りますまいか？」

桃太郎は悠然と頷いた。

「日本一の桃太郎は犬猿雉の三匹の忠義者を召し抱えた故、鬼が島へ征伐に来たのだ。」

「ではそのお三方をお召し抱えなすったのはどういう訣でございますか？」

「それはもとより鬼が島を征伐したいと志した故、黍団子をやっても召し抱えたのだ。—どうだ？ これでもまだわからないといえ、貴様たちも皆殺してしまうぞ。」

必然性のない桃太郎の〈計略〉と理由のない〈処罰〉に対する鬼の仕返しという〈計略〉は、〈処罰〉より重い価値をもつ。つまり、B 型では〈処罰〉は稀薄であり、〈悪事〉と〈計略〉が中心価値をもつことになる。物語

のシンタクスという点では、この連鎖はA型もB型も同じであるが、物語のパラダイムという点では、ここでも「裏返しの手法」が使われているのである。

ストラテジー
5. 戦略 - 3

細かい部分での「裏返しの手法」も確認しておきたい。筋ばかりではなく、登場人物や小道具に至るまでこの手法が応用されている。

爺婆は桃太郎に愛想をつかしていた。家来たちもひどいものである。忠義どころではない。おまけに仲が悪い。黍団子すらなさけない。

(家来)

しかし彼等は残念ながら、あまり仲の好い間からではない。丈夫な牙を持った犬は意気地のない猿を莫迦にする。黍団子の勘定に素早い猿はもっともらしい雉を莫迦にする。地震学などにも通じた雉は頭の鈍い犬を莫迦する。……こういういがみ合いを続けていたから、桃太郎は彼等を家来にした後も、一通り骨の折れることではなかった。

その上猿は腹が張ると、たちまち不服を唱え出した。どうも黍団子の半分くらいでは、鬼が島征伐の伴をするのも考え物だといひ出したのである。すると犬は吠えたけりながら、いきなり猿を噛み殺そうとした。もし雉がとめなかったとすれば、猿は蟹の仇打ちを待たず、この時もう死んでいたかも知れない。しかし雉は犬をなだめながら猿に主従の道徳を教え、桃太郎の命に従えと云った。それでも猿は路ばたの木の上に犬の襲撃を避けた後だったから、容易に雉の言葉を聞き入れなかった。

(黍団子)

「桃太郎さん。桃太郎さん。お腰に下げたのは何でございます？」

「これは日本一の黍団子だ。」

桃太郎は得意そうに返事をした。勿論実際は日本一かどうか、そんなこ

とは彼にも怪しかったのである。

「属性」の「裏返し」は、主人公の桃太郎や家来のみならず、鬼もそうであった。平和愛好者の鬼たちは次のように描かれている。

鬼が島は絶海の孤島だった。が、世間の思っているように岩山ばかりだった訣ではない。実は椰子の聳えたり、極楽鳥の囀ったりする、美しい天然の楽土だった。こういう楽土に生を享けた鬼は勿論平和を愛していた。……鬼は熱帯的風景の中に琴を弾いたり踊りを踊ったり、古代の詩人の詩を歌ったり、頗る安穩に暮らしていた。そのまた鬼の妻や娘も機を織ったり、酒を醸したり、蘭の花束を拵えたり、我々人間の妻や娘と少しも変らずに暮らしていた。

ここでもうひとつの興味深い描写がある。芥川は鬼の視点から人間を見る。伝承ならば、人間の視点から鬼を見て、その恐ろしさを述べる段である。我々にとっての鬼は、地獄の番人で角と牙をもつ恐ろしい存在なのだが、芥川の「桃太郎」では、人間の方が恐ろしい。

殊にもう髪の毛の白い、牙の脱けた鬼の母はいつも孫の守りをしながら、我々人間の恐ろしさを話して聞かせなどしていたものである。……

「お前たちも悪戯をすると、人間の島へやってしまうよ。人間の島へやられた鬼はあの昔の酒頭童子のように、きっと殺されてしまうのだからね。え、人間というものかい？ 人間というものは角の生えない、生白い顔や手足をした、何ともいわれず気味の悪いものだよ。おまけにまた人間の女と来た日には、その生白い顔や手足へ一面に鉛の粉をなすっているのだよ。それだけならば好いのだがね。男でも女でも同じように、嘘はいうし、欲は深いし、焼餅は焼くし、己惚は強いし、仲間同志殺し合うし、火はつけるし、泥棒はするし、手のつけようのない毛だものなのだよ……」

ここにもまた部分的な「裏返し」があり、視点を一時的にはあるが鬼

の側に移している。この作品の視点は常に桃太郎にある。この視点の移動は冗長的であるが、桃太郎と鬼の属性を裏返しにする上では効果があることは認められよう。

ストラテジー

6. 戦略 - 4

桃太郎の出生は神秘であった。少なくとも、民間伝承では「桃太郎」の母はわからない。民間伝承も芥川作品も、桃から生まれる「異常誕生」という点では同じである。ところが、芥川は神話的要素を導入している。川をドンブラコと流れて来た桃であるが、民間伝承では桃の成る木の在処は定かではない。芥川は「桃太郎の母」たる「桃の木」の存在を描いている。

むかし、むかし、大むかし、ある深い山の奥に大きい桃の木が一本あった。……この桃の枝は雲の上にひろがり、この桃の根は大地の底の黄泉の国にさえ及んでいた。……その神代の桃の実はこの木の枝になっていたのである。

一万年に一度結んだ実は一千年の間は大地に落ちないのだが、ある日ヤタガラスによってついばみ落とされる。これが桃太郎の桃であった。宇宙樹である生命を結ぶ木を母とする桃太郎は貴種である。伝承の桃太郎は、素性のわからない桃から生まれた。決して貴種とはいえない。この身分の位相も、作品全体に見られる「裏返しの手法」のひとつと考えられる。そして、物語の始めと結びにこの桃の木の場面を描き、物語の枠組みを設定する。これによって、この作品は単なる伝承昔話ではなく、神話的物語としての性質を帯びるのである。

このように「桃太郎」は、実に技巧的な作品である。「桃太郎」という〈素材〉（ファースト）は、「裏返しの手法」によってみごとに〈筋〉（シジュエート）へ置換される。この物語は単なる「桃太郎」のパロディーではない。

その根底に技巧的な手法が利用されることによって、独自の作品としての基盤を成立させていることは明らかである。そしてここに、いかに「桃太郎」は組み立てられているか、を見ることができよう。

7. 「桃太郎」の位置

「芥川龍之介事典」によると、「桃太郎」は「かちかち山」「教訓談」「猿蟹合戦」などと同じ作品系譜に属するものである。それでは、これらの作品でも、「裏返しの手法」やそれに類するような技巧が使われているのだろうか。あるいは、昔話を素材にしていると考えられる他の作品（「犬と笛」「仙人」など）ではどうであろうか。

結論から先に述べるが、「桃太郎」ほど技巧に走った作品はない。

「猿蟹合戦」は一種のパロディー作品といえようが、本来の話しの後日譚になっている。「教訓談」とその草稿「かちかち山」は、本来の話しをもとにして教訓を導いている。この系譜の作品の根底には「童話時代」（「教訓談」）を超越して、現実世界を覚めた目で直視する芥川のねらいがあるであろう。「かちかち山」は「…野性の獣性を亡ぼす争ひに、歓喜する人間を象徴しようとするのであろう…」の一文で結ばれる。「教訓談」には「わたしはあの話を思ひ出す度に、何か荘厳な気がするのです。獣は獣の為に亡され、其處に人間は栄えました」とある。さらに「桃太郎」中の鬼から見た人間の描写を考え合わせれば、ここに共通するモチーフは、人間のもつ獣性の暴露といえよう。しかし、作品成立の手法は「桃太郎」と他の二編では違っている。

昔話を素材とする作品とも、「桃太郎」の手法は異なっている。「犬と笛」は「童話」という範疇で扱われるが、この作品の典拠は昔話である。世界的に広く分布する「さらわれた三人の王女」がそうである。日本では「甲賀三郎」が類似する筋を持つ⁽¹⁾。また、1922年の「仙人」は「オトギバナシ」

であるが、プーシキン⁽¹⁾の創作昔話に典拠を持つようである。A.マモーノフは「日本におけるプーシキン」の中でV.グリーブニンの著作を引用して、「仙人」とプーシキンの「坊主とその下男パルダの話」と類似を指摘している。⁽²⁾いずれにせよ、この二つの作品は典拠に準ずるものであり、「桃太郎」ほどの技巧的な作品に仕上がっていない。とくに「犬と笛」は、「赤い鳥」掲載とはいえ、登場人物をかえて、舞台を日本に移したこと以外は典拠と寸分も違うものではなく、決して「上出来」とはいえない。

そうすると、「桃太郎」は素材利用という点では「犬と笛」「仙人」と同じ系譜になり、モチーフという点では「かちかち山」「教訓談」「猿蟹合戦」と同じ系譜になることになる。

それでは、この「桃太郎」はどのように位置付けられるべきであろうか。あるいは、このような技巧的な作品が何故、1924年という年に書かれたのであろうか。本稿は、これに対する明解な解答を引き出すことが目的ではないので、いくらかの推論を呈して、今後の課題にしたいと考える。

「芸術その他」で宣言された意識的な芸術活動は、1923年（大正12年）に事実上自ら否定することになる。そして、彼の「私小説」的な保吉物が執筆されていく。「桃太郎」の発表された年には、「少年」も同じく発表されている。三好行雄によれば、「保吉物のひとつである『少年』で、無意識に母を呼ぶ声を描いたとき、龍之介は確実にひとつの門をくぐった。かたくなに拒みつづけてきた〈告白〉の禁忌が破れたのである。」（三好1975：101）という。この1924年（大正13年）という年は、芥川にとってはさらなる転機の年であったのだ。

この作品は「芸術家が退歩する時、常に一種の自動作用が始まる。と言う意味は、同じような作品ばかり書く事だ。」（「芸術その他」）⁽³⁾という点からすれば、意識的に「自動作用」が避けられていることは明らかだろう。もちろん、他の作品でも「自動作用」が避けられていることは確かである

が、かくも〈技巧的〉にあるいは〈意識的〉にそうであるかといえ、否と答えるしかなかろう。この年にこのような作品が書かれたのは、芥川の最後の「足掻き」とも「諦め」とも読みとれる。3年後に自殺を計る芥川は、この時期にすでに〈小説の技巧〉に対して、そして〈意識的芸術活動〉に矛盾をきたしていたのではないだろうか。

本稿の分析が恣意的すぎるという批判はまぬがれない。けれども、『桃太郎』のもつ意味はあらためて問われる必要があることを確認しておくことは無駄ではない。そして、死に至るまでのこの時期を改めて見直すことも必要であろう。桃の実の中に何人とも知らず眠っている未来の天才は、結局現れなかったのだから。⁽⁴⁾

(1991. 9. 24)

(注)

- (1) 「さらわれた三人の王女」の基本的な筋は次のようになっている。三人の王女が怪物にさらわれる。勇士と三人の旅仲間（檜の勇士、山の勇士、髭の勇士など。それぞれが特技を持っている）が、探索に出かける。勇士は三つの国（金、銀、銅など）を順に巡って怪物と戦い、王女を救出する。そのさいに、王女たちは何らかの品物を手渡す（ときにはこっそりと袖などに入れておく）。勇士は旅仲間あるいは自分の兄弟などの裏切りにあって怪物の国に取り残される。裏切った仲間（兄弟）が王女たちの救出者であると偽り、結婚の権利を得る。怪物の国から出てきた真の勇士は変装して結婚式に乗り込むが、王女たちの与えた品物などによって身分が明らかにされる。詳しくは宮廻1988参照。
- (2) プーシキン「坊主とその下男バルダの話」の概要。下男を捜していた坊主はバルダと出会い、バルダは年3回坊主のおでこをはじかせ、毎日麦がゆを食わせるという条件を自ら出して雇ってもらう。バルダは4人前食って、7人前働いた。坊主はおでこをはじかれることを恐れ、難題

を課して支払いを延ばすことを策略する。バルダはその難題を果たし、約束通り3回坊主のおでこをはじき、坊主は頭がおかしくなる。バルダは「安物買いはせぬことだ」という。V.グリーブニンの著作『芥川龍之助』（原文ロシア語）は筆者未見のため、彼の論は不詳。

- (3) 「芸術その他」は1919年（大正8年）に発表されている。この「自動作用」で連想されるのは、ロシヤ・フォルマリストの重鎮V.シクロフスキーである。彼は芸術の手法として、ものを「自動化」の状態から引き出す「異化」の手法を論じた。この理論は『手法としての芸術』で論じられていて、1917年に発表されている。当時芥川がこの理論を知っていたかどうかは不詳だが、時をほぼ同じくして類似の思想が表されたことは興味深い。なお、シクロフスキーの論集『散文の理論』は1925年（大正14年）に刊行される。このふたりの芸術論も比較の必要性はあろう。まさに、1920年代世界文学の位置付けの中で。

- (4) 1924年に発表された『僻見』の一節。「僕は上海のフランス町に章太炎先生を訪問した時、剥製の鰐をぶら下げた書齋に先生と日支の関係を論じた。その時先生のいった言葉はいまだに僕の耳に鳴り渡っている。——『予の最も嫌悪する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本国民にも多少の反感を抱かざるを得ない。』——」。『桃太郎』執筆の背景にこの発言の影響があることは確かだ。しかし、発言の影響と作品の手法の問題は別個のものである。もちろん、章の発言も重要だが、文学理論、文芸批評の立場からは、まず作品の「読み」を重視したい。

なお、本稿の引用は「芥川龍之介全集」（岩波書店）による。

(参考文献)

- 池上善彦 1982 「ことばの詩学」 岩波書店
- 菊地 弘 1977 「龍之介の方法」 『近代文学4—大正文学の諸相』
三好行雄編 有斐閣
- 菊地 弘他編 1985 「芥川龍之介事典」 明治書院
- 宮廻和男 1988 「さらわれた三人の王女」 『昔話伝説研究』第14号
国学院大学
- 1990 「イーハトヴの不思議な世思—その語りの構造—」
『文学研究論集』第7号 筑波大学比較理論文学会
- 三好行雄 1975 「序に代えて」 『国文学—解釈と教材の研究』
第20巻第2号 學燈社
- 関 敬吾 1980 「日本昔話大成」第3巻 角川書店
- A.マモーノフ 1984 「日本におけるプーシキン」 ナウカ
レニングラード (ロシア語)